



公益財団法人 佐野美術館館長

坪井則子氏

プロフィール

東京都出身。慶應義塾大学哲学科美学美術史学専攻卒業後、佐野美術館で学芸員として展覧会の企画・運営にたずさわる。専門は日本美術史（工芸）。特に人形関係の展示や作品調査・研究をおこなっている。

誰でもいつでも自由に 興味のある扉を開ける場所

三島市の名誉市民である実業家の佐野隆一氏が、ふるさとの子どもたちが気軽に美術品に親しむことを願って1966年に設立した佐野美術館。三島の文化拠点として、日本美術を中心に、絵本や写真など幅広い分野の展覧会を開催し、最近では刀剣の人気で全国から注目を集めています。そこで学芸員として勤め、昨年2019年に館長に就任された坪井則子氏にお話を伺いました。

—— 佐野美術館はどんな場所でしょう。

美術館は、博物館（ミュージアム）の一種ですが、博物館というのは、いつでも自由に見られ、誰にでもオープンな場所だと考えています。これは世界中の博物館に共通する考え方です。

三島は人口11万人弱の小さな市ですが、この人口規模で街中に美術館があるのは、実はとても恵まれていると思います。街の中をちよつと行けば美術館があり、一年中開いていて、様々な美術作品に出会えるというのは、豊かな街ですね。

しかし、実際のところ、博物館の必要性の感じ方は人によってかなり違うように思います。美術館や博物館が世の中から全部消えてしまったらとても寂しいと思う人もいれば、それよりも大事なことがたくさん

あるという人もいます。だからこそ、一人でも多くの地域の子どもたちや親御さんに来てもらい、市内にこういう場所があるのだと知ってもらおうチャンスをつくっていききたいと思っています。幼少期に博物館を訪れていた人は、大人になっても来てくれると思いますので、子ども頃から親しんでもらいたい、博物館人口を増やしていきたいです。

より多くの人のアンテナに届くように

人によって、興味のアンテナに引っかかる情報は違います。でも何らかのきっかけで、その違うアンテナに佐野美術館のことが届き、興味をもつきっかけになるかもしれません。いろいろな人のアンテナに引っかかるためにも、こちらが広い視野をもって情報を発信していかないといけないですよ。毎年、絵本作家の展覧会など、家族で行きやすい展覧会を開催していますが、それをきっかけに、どんな場所なのかを知って頂きたいです。館内にも日本中の博物館の展覧会など、様々な情報を出しているの、興味や関心を広げる場所として来てもらえたらと思います。

三島の印象を聞かせてください。

三島は街としてコンパクトで、都市機能が集中しているのが面白いと思います。歩けるエリアに全部が集結していて、買物のついでに佐野美術館なんてこともできますよね。街中のせせらぎや、電柱の地中化などもありきれいになりましたね。

爆発的に何かが起こる街ではないと思いますが、それが暮らしの安心感にもなっていると感じます。外にもそこそこ開かれている。観光の目玉がほとんどにあり、色んなことが程よい無理のない街なのだと思います。

「広報みしま」4月1日号に市民招待券がついていますので、是非ご家族で一度足を運んでみてください。色々な情報が得られますし、思いもよらないような新たな扉が開かれるかもしれません。こんな身近に、知らなかった世界に触れるチャンスがありますよ。

博物館は楽しみ、共有し 好奇心を満たす場所へ

—— 多くの人に関心を持ってもらうための働きかけについて教えてください。

日本では博物館というと昔から「貴重なものを見せていただいている」という意識があります。しかし博物館の所蔵品やそれに関わる情報は、博物館だけのものではなくみんなのもので。世界中の誰もが見て楽しみ、好奇心を満足させたり、新しい知識を得たりと、みんなが共有できることが一番良い、というのが世界的な流れになっています。

この、自分たちが楽しみたい、見たことをみんなに言いたいという「見る権利」は、近年SNSなどで誰もが発信できるようになったことで、博物館側も急速に重要視するようになってきました。

佐野美術館もツイッターやフェイスブックで情報発信や収集をしています。特に刀剣展はお客様が感想や意見をたくさん書いてくださいます。それを美術館がツイートしたりして、広めていくこともあります。美術館とお客様という垣根を超えて、みんなで楽しもうという時代ですね。

佐野美術館では最近、展示している所蔵品や所蔵者の許可が出ている作品については、写真撮影をOKにして、自由に発信していただけるようにしています。



【小中学生対象講座「日本刀を持ってみよう」】
（「名刀への道」展 2020年1月25日）

刀剣展だけでなく、人形の展覧会も年に一度のペースで行っています。定期的に展示を行うことで、コレクションの寄贈をいただくことも増えてきました。博物館であれば個人の方が長年大切に集めてきた作品を良い環境で収蔵できましますからね。この、守り伝えることも博物館の役割の一つで、小さな美術館ですが、人形のコレクションも特色になってきているかなと思います。

世界を広げるたくさんの チャンスがある時代

—— これからの佐野美術館が目指すものについて教えてください。

美術ファンを大事にしながら、今まで以上にご家族連れや若い世代にむけた展覧会を開催したいです。

ワークショップなどにも参加してもらえたらいいですね。子ども向けのワークショップでは、はじめに学芸員が展示室でギャラリートークをすることもあります。いろいろな間口から興味が広がるようにしていきたいです。

子どもが博物館を利用しないのはもったいないと思います。私が子どもの頃は、ワークショップはほとんどありませんでした。今は参加のチャンスがたくさんあるんです。佐野美術館では、日本刀を持ってみようという講座を刀剣展のたびに開催していますが、いつもたくさん親子から応募をいただきます。

また、出張授業として、小中学校に美術作品を持って出向き、実際に掛け軸や工芸品を見せて作品の話をしたり、ワークショップを開催したりすることもあります。子どもたちはみんな、興味をもって参加してくれれます。だから気軽な気持ちで子どもをいろいろな展覧会にも連れてきてもらいたいと思います。そこから興味が広がるかもしれませんから。

博物館に親しんでもらうためには、利用しやすいようにする雰囲気づくりも必要だと思っています。こちらがどこかで居丈高になっていたら、親しもうと思ってもできないですよ。幅広くという意味では外国の方へのアプローチも進めていきたいです。



佐野美術館
静岡県三島市中田町 1-43
<https://www.sanobi.or.jp>

「三島カルチャーをつくる人びと」は、「三島の文化応援プロジェクト」が、三島周辺に拠点を置く企業や三島の文化に関わる方々に、三島の文化についてインタビューするシリーズ企画です。配布場所／生涯学習センター、三島市民文化会館、市内文化施設等 詳しくは下記のwebサイトをご覧ください。